

Title	「資本」なる名辞の変遷(下)
Sub Title	
Author	園, 乾治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.11 (1921. 11) ,p.1498(86)- 1507(95)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211101-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

輸入外國貨物にして、之を購ふ爲め外送せる諸貨物に費やされたる勞働量に依て測定せらる可くんば、購入物の如何を問はず、其價值の増加することなきは固より眞なり。然れども若し輸入外國貨物の價值が、從來の如き方法、即ち貨幣か勞働か、或は輸入せられたる曉きにその支配すべき貨物量かを以て測定せらるゝときは、當局商人をして巨利を博せしむる冒險成功の直接の結果は、國內價值額の増加にあるべきこと毫末の疑なし。輸出物の價值に比較して輸入物の價值は、此の特殊の貿易に於ては平常よりも大なるべく、此の一方面に於ける價值の増加は必然的には別の方面に於ける價值減少に依て相殺せらるゝ事なかるべし。また實際に大多數貨物の價值が、その貨幣に測らるゝと勞働に於て測らるゝとを問はず、同時に騰貴することは最も普通の事たるなり。

れる言葉であるが、それが段々に個人經濟にも政治算術にも、又は經濟學にも用ひられるやうになつて來たのである。初期に於いては個人は何等かくの如き言葉の必要を見なかつた。原始的農業家は自己並びに家族の食糧を、殆んど總て自己並びに家族が、土地を手づから耕作して得たのである。それだから Abraham と Lot の如く彼の家畜 (stock of cattle) の増加。または土地の状態の改善に注意するのみであつて、彼等は恐らく幾何の貨幣をその事業に放下し、さうしてその金額に對して一〇パーセント或ひは幾パーセントを利得したといふ言ひ方を、夢想だもしなかつたに違ひない。また初期の工業家は彼の道具 (stock of tools) が改善せられ、または駄目になる時、及び彼の材料 (stock of material) 或ひは既成品が増減したる時を知れども、彼がその事業に投じたる貨幣額に對して、如何なる

さればリカルド氏が其用語の定義及び適用、並に經濟學根本原理の或物を論ずるに當りて、用心甚だ足らざりし事は之を認めざる可からず。而して予は別の處に述べたるが如く、讀者の多くが彼れの著を難解となす理由の一が茲にあることを疑はざるものなり。既に甚だ耳目に慣れたる舊語辭の新意義に用ゐらるゝときは、著者に取りては其適用を一貫すること殆ど不可能にして、讀者はまた之に附せられんとする意義を常に心に留むること極めて困難なるなり。

「資本」なる名辭の變遷(下)

園 乾 治

四

以上述べたところで大體明かである如く、この資本といふ言葉は、會社の財に就いて用ひら

利潤を得つゝあるかといふことを、知る必要は決して起らないのである。

然しなから、會社に關聯してこの資本といふ言葉は段々に使用せられるやうになり、多數の人々就中商人は、その事業に投じたる貨幣額を計算することが出來、さうしてその金額に對して幾パーセントの利益を得るかを計算することが便利であり、その利益の割合によつて同時期に於ける隣人の事業とその成績を比較し、或ひは以前の自己の事業の成績と比較することが出來、尙ほまた或る方面の事業を開始し、他の方面の事業を中止するのが適當であるかを知り度いのである。然るに投下したる貨幣額を表示するものとしては「stock」といふ言葉は、便利なものといふことが出來ない。何故なればこの言葉は時には投下した貨幣額を意味することもあるが、物を意味することが多いからである。或る

人の "stock-in-trade" と云へば彼が商買に用ふる物を意味するのである。然し今必要とする言葉はこの stock in trade に投下した貨幣額を示す名目である。さうしてこのために從來會社の stock in trade に投下した貨幣額に使用した言葉を、布衍して用ひるやうになつたのは自然である。かくの如くして人々は某々會社に資本を投ずるといふと同じく、彼等自身の個人的事業にも資本を投ずるといふことを語るやうになつたのである。

斯くして Postlethwayt の Universal Dictionary of Trade and Commerce は一七五一年に次の如く書いてゐる。

「資本 (Capital) とは貿易商、銀行家、商人の間に於ては組合 (partnership) を組織するに方りて Common stock を寄せ集めるために、個人が提供する貨幣額を意味するものである。この言

したる stock であると考へてゐる。さうしてこの stock といふ言葉は明かに、初めて事業に用ひられたる貨幣を指してゐるのである。商人は先づ事業に投資する前に、これが用意をしなくてはならぬ。商人は資本を使役 (employ) してゐるのである。投下した後にもそれは依然として存在するのであつて、決して無くなるのではない。彼は尙ほ損失しない限り——常態ではこんなことはない——これを所有してゐるのである。資本といふ言葉は既に投下した貨幣に用ひられるやうになつたのである。一度投下して終へば商人の資本は會社の資本と類似のものである。只同じやうに固定せしめて置く必要がない、といふことだけが重要な相異點であるのみである。

會社財政に於いては資本は一定したものとするのが便利である。時には新しく募集するか、

葉は商人個人が最初に、自己の計算に於いて事業に投下したる stock にも用ひ、また商事會社或ひは組合の基本金をも意味することがある。さうしてこの場合には stock といふ言葉を附け加へて用ふることが多い。例へば銀行の Capital stock といふやうに用ひられるのである。資本は利潤又は利得と相對する言葉である。勿論利潤が資本に加はる時には、屢々資本を増加しその一部分となることはある」。

Johnson の財政經濟に對する態度は、相場師 (stockjobber) を解釋して公債の賣買によりて金儲をする低級なる徒輩である、といふことによりて略々知られるのであるが、氏は一七五五年に至つても capital を名詞として認めないで、"capital stock" を「原則的又は本來的 stock」であると説明してゐる。

Postlethwayt は商人の資本は彼が最初に投下又は利潤を振替えて増資することもあり、また極めてまれには減資することもある。然しながら若し營業上の財貨並びに會社によりて得られたる暖簾から債務を控除したるもの、貨幣價值が變動する毎に、資本が絶えず變動するものとすれば、二の概念を使用する便宜の全てまたは大部分は失はれて終ふことになる。若し各銀行または鐵道の資本が毎半季または一年に、一六九七年の法令の主旨に基いて變更せられるとしたらば、株式の賣買またはその他あらゆる處に於いて、配當の支拂に非常なる混亂を來すであらう。會社の資本は今でも時には名目資本 (nominal capital) と呼ばれることがあるが、これを屢々變更すれば種々の不便を伴ふを免れない。然かるに個人にとりては名目資本の必要はないのである、何故なれば彼には株もまた利潤を分配すべき株主もないからである。その結果

彼はその事業の資本とは、營業上の財貨と暖簾關係の貨幣價值であると考へるであらう。もしそれが前期に決算したときよりも減少して居れば、それだけ事業の資本が減少したものである。反對に増加すればまたそれだけ増加するのである。かくの如くして商工業家の資本は會社の資本の如くに、最初投下した貨幣額と歴史的な關係を有するさまりきつた數字を意味するのでなく、一定時の營業上の財貨と暖簾の貨幣價值を意味することになつたのである。

五

自分の思ふところを以てすれば、十八世紀に於いては商工業家の *estate* の意義を擴張して個人の所有する資産の全部を包括せしめた人はないやうである。それは個人が商業家として或ひは工業家として所有する資産に限られてゐるのである。會社が設立せられる場合にはかくの

業は使用し、一部は彼並びに彼の家族の生活のために使用するかも知れない。また彼の家屋は一部工場となり、車輛や馬匹は或る時には事業に使用せられたり或る時には生活のために使用せられることもあるであらう。

この問題に就いては觀察の目的によつて種々の解決が行はれるであらう。然し何等かの方法を以て事業の資本とそれ以外の個人の資産とを區別することは必ず出来る。例へば或る人がその事業を中止することによつて、若し失ふところがありとすれば、それは幾何であるかを發見するためには、家屋の用途を二分して、事業より引退すれば住宅に幾何の費用を支出するかを訊ねて、その金額を現在の住宅であり且つ工場である家屋の賣買價格より控除し、その殘額を以て事業の資本といふが如くである。

最近に至つて土地は資本の中に容るべきであ

如き疑問の起る餘地がない。會社の事業に使用する資金は當然に各社員が個人として所有する財産とは分離したるものである。勿論その會社が所謂無限責任 (unlimited liability) 會社である場合には、かくの如き區別は無くなるものである。けれども昔の會社は現今の會社と同じく有限責任のものが多くあつた。その故に會社の資本と投資者の資産とを區別することは困難ではなない。たゞ個人が個人の計算で事業を經營する場合には、彼の事業に屬する資産とそれに關係しない資産とを區別することが困難である。凡てのものは彼は歸屬し、彼は全部のものを以て彼の負債に對して責任を負はなくてはならぬのである。事業の蹉跌によつては家具、住宅をも失ふ結果ともなり、生活に費を盡す結果は事業に必要な資金を涸缺せしめその失敗を招かぬことも限らない。彼はその所有する財貨の一部は事

るかどうか、といふ問題が屢々論議せられた。この問題は資本は放下せらるゝ、又は既に放下せられたる貨幣であると考へられてゐた間には起らなかつたものである。土地並びに各種の動産を購入せんがために一萬磅の資本が投せられたとして、土地購入に要したる金額例へば二千磅を控除して資本金八千磅であると云ふものは誰もあるまい。會社である場合には半ば一定した金額である資本は、購入したる土地の價値の變動があつても影響を蒙ることはない。然しながら個人の場合には時々その所有する資産の價値評定をするに方つて、その資産中に包括せらるゝ土地の價値變動は、他のものゝ價値變動と同じやうに看過せらるゝ場合もあり、さうでない場合もある。即ちある時には原價で見積られ、またある時には市價で見積られることがあ

る。吾々は資本とは貨幣の投せられたる事物で

なくて投せられた貨幣を自身であると常に思考せられたのであることを忘れてはならぬ。

六

資本といふ言葉を國民の事項に適用すればどうかと云へば、少くとも二人のミス學派前の學者並びに多分他の人々は、資本の合計を國民資本としてゐる。Discourse of Money 一六九六年の著者は一九八頁に於いて「the capital stock of national treasure」のことを述べ、Andrew Hooke なるの著 Essay on the National Debt and National Capital 一七五〇年に於いて國民資本は、一現金、證券又は鑄貨、二動産、即ち金屬板、地金、寶石、指環、家財、衣服、船舶、在荷品、消費品、役畜、三土地、國內の總ての土地の價値、より構成せられるものと論じてゐる。

かくの如き状態であつた時にアダム・スミス

ければならないからである。「殷富の容易に進まない」最大原因の一は、労働が分割せらるゝ前に必要なる財貨の蓄積が困難であることである。何となれば「財貨を有せざる貧民は決して工業を開始することは出来ない」また「人は農家となるに先つて少くとも一ケ年間の貯蓄を持たなくてはならぬ。彼は季節の終りにならなくては労働の結果を収めることが出来ないからである」、それだから「狩獵、牧畜民族にありては彼が雇傭せられる普通の事業から身を退かなければならない」。その事業といふのは生活を維持する財貨を所有し他の事業を開始するまで彼に日常の必需品を供給するものである。「仕事を初めるための財貨の蓄積を有せず」、鶴嘴、鋤又はシヤヅルの外使ふべきものを持たない野蠻人は財貨を貯ふるに極めて大なる困難に遭遇し、財貨の蓄積を生ずるまでは、分業は發生すること

が現れてこの言葉を取扱ふことになつた。さうして彼の「講義」の二四八頁の註釋に只一個處、貸付金の元金としてこの言葉が用ひられてゐるのみである。曰く「私人にある貨幣額が貸付けられる時、債權者は元金並びに利子に満足するならば、債務者の厄介になることが出来る。然し政府が借款を起す場合にはこれと同じ關係にはない。政府は三、四パーセントの永久年金の權利を與へる。けれども元金の請求權はないのである。」と。この「講義」に見出すことが出来る如き「國富論」の學說の先鞭は、また「stock」に就いてもこれを期待しなくてはならぬ。獎勵金は否認せられる。何となれば「何れの國に於いても食料品、衣服、住居が貯へられてあり」さうして若し獎勵金が一種の事業、もの、又は雇傭に與へられると他のものから、容易に取去られるから雇傭せられる人數はこれと比例しな

能はず、且つ分業の發生する以前に於いては財貨の蓄積は頗る小ならざるを得ない」(二二二—二二三頁)。

内部の不秩序及び外部の侵襲に對する保障の不十分なることは蓄積を困難ならしむる他の一の障礙となる。土地に對する課税は財貨に對する課税を區別せられ、財貨に對する課税は「或る個人に價するところのもの」を發見すること、を要するから非難せられる。それだから個人の財貨は土地以外の所有物の總てを包括するものと解釋しなくてはなるまい。

七

「國富論」第一卷に於いて capital といふ言葉を聞くことは多くない。stock といふ言葉が「講義」に於けると同じやうに重要な役目を演じてゐる。三の「價格組成部分」の一であり、且つ三の「凡ての收入の本來的源泉」の一であるもの

は「capitalの利潤」にあらずして「stockの利潤」である。(五四頁) また第九章は「stockの利潤に就いて」である。只一個處に於いて除外とも思はれるものがあるのは、「社會の capital stock」「大不列顛の capital stock」が「國の stock」と同じ意味の言葉として突然に現はれるところである(九五頁)。capitalといふ言葉は個人事業に關係したときに用ひられるのみである。然し physiocrats が “advances” 及び “capitaux” といふことを論じ、且つその生産的並びに不胎的勞働の説をなのは、スミスをして更に進みて stockの本質を研究せしめたやうである。その結果は第二卷の「stockの本質、蓄積並びに使役」といふ個處に之れを見ることが出来る。彼は個人的 stockと社會的 stockとを “capital” 並びに「直接消費のため蓄へられたる stock」との二つの部分に分つてゐる。このスミスの述べた

ものしに用ひられる。かゝる説は貨幣の放下せられんとする、または既に放下せられたるものを資本であるとする古き陳套なる資本觀を有する者の云ひさうなことである。同じく少しく下の部分には「農業家の勞働する家畜並びに器具の價格または價值」及び「種子の價值」は農業家の資本の一部であるとしてゐる。然かも同節に於て「羊の群または家畜の群」はそれ自身を資本としてゐるのである。

若しスミスが自ら資本に加へたる、“stock” “trade”と殆んど同じ意義である新しい意味は、古い完成せられたる意味と相異なるものであることを認めたらば、彼は自説を固執したかどうか疑問である。さうしてまた異説を樹てないか、或ひは異説を明晰に説明したならば、これより起る多くの紛糾は生じないで済むだかも知れない。しかしそれはこの論文で取扱ふこと

るところは從來汎く行はれたる資本の概念とは嚴格に區別せらるべきものであることを示してゐる。即ち資本を放下せらるべき貨幣額または既に放下せられたる貨幣額であると云ふに代へて、スミスは物自身を資本であるとするものである。stock を獲得するために費したる貨幣額であるとする代りにスミスはそれ自身を以て資本の一部とするのである。然しこの變史は讀者に指摘せられてはゐない彼も極めて無意識に取扱つてゐる。彼は絶えず右い概念に専ら使用せんとする書き方に立歸つてゐる。即ち資本と非資本とに stock を區別したる後直ちに「財貨の耕作、製造、又は購入及び利得して再び之を販賣するために資本は使用せられる」べきことを述べてゐる。また資本は「土地の改良、事業上の有用なる器械並びに器具、または所有者を變へることなくして収入又は利潤を生ずる總ての

出來ない別な問題である。(完)

社會思想家としての

ウヰリアム・モリス (五)

加田 哲二

一三

「進化の緩慢と云ふ事を説く人達はイギリスの社會主義の發達を研究して見るといい。進化は緩慢だ。しかし其の度は一樣ではない。眠つてゐるやうな時期もあれば、突如として進んで行く時期もある。」(P. Kropotkin, Memoirs of A Revolutionist, P. 442 大杉榮氏譯本五四四頁) これはクロポトキンが千八百八十一年の新曆の十一月にトノンからロンドンに移つて、そこに一年間ばかり滞在して、社會主義運動の推勢を